

姫路革文庫の名定一呂

学術博士・元(社)日本タンナーズ協会専務理事 出口 公 長

名定さんとの出会い

名定さんとは頻繁ではないが、何回となくお会いしてきた。私は「名定氏に会えるようにして欲しい」との依頼をよく受け、それを伝えるとその度に快く応じてくださった。初めてお訪ねしたのは、私が姫路白なめし革の調査を個人的に始めてそれほど間のない頃であった。昭和47年1月、後に文化財保存技術保持者第1号になった漆芸家北村大通氏（奈良市）とレザークラフトの大家浅尾虚遊氏（大阪市）のご両人が、当時の県立皮革工業指導所に革文庫に関する調査のために来訪された。服部裕所長の要請でその応接の場に私も出席し、意見交換の後、高木の白なめし革業者及び革文庫の名定一呂（本名は一郎）さん方を案内した。北村さんは当時、文化庁の依頼で関係を持ち、正倉院宝物の漆皮箱の復元等にも取り組んでいたのである。来訪されたのは、漆皮箱の製法の参考になるかもしれないと



写真1 革細工に勤しむ名定一呂氏。所狭しと設備や工具が並ぶ。(昭和61年撮影)

の考えであったようである。

それ以来、何回となくお訪ねするようになった。その名定さんは平成16年夏に亡くなられた。その新聞記事を紹介して功績と足跡を振り返ってみたい。(別表参照)

県の民俗文化財調査事業

どこの国・民族においても同様であるが、兵庫県にも姫路市にも伝統的な技術が多く伝えられている。昭和61・62年度において、文化庁の指導と国庫補助金を得て、兵庫県教育委員会は「兵庫県諸職関係民俗文化財調査」を行った。調査の目的は「全国各地に伝承されてきた様々な生活用具やその他の用具・用品等を製作・加工する伝統的技術は、地域に根ざした無形の民俗文化財として、又、わが国の優れた伝統工芸技術の基礎として意義の高いものであり、それに使用されてきた用具類においては注目すべきものが少なくないが、近時の新しい素材や技術の開発と生活様式の変化等にもなって衰退・変化しつつある。従って、これらの諸職・技術の実態及び変遷について調査・記録し、関係資料の収集・保存・活用あるいは伝統工芸技術の保存に資すること」とされた。

調査対象の革文庫製作

2年間において調査する予定種目は152件で、調査票は、文化庁から提示された様式

をもとに作成され、記入事項は17項目であった。必要によって特記・図解・写真貼付等をした。

姫路市では15件が選定され、この中に「白なめし革」（伝承者：森本正彦）及び「姫路革細工（文庫）」（伝承者：名定一呂・横道 明）が含まれ、調査員として筆者が委嘱された。今から思えば十分な調査とは言いがたいが、類似の記録が乏しいことを考えて筆者が聞き取りした内容を紹介し、同氏の功績を顕彰したい。

出口調査記録 昭和63年3月報告書

名定一呂 大正6年12月28日生（1917）

1. 総観

（1）地域的特色

- ①姫路市は、兵庫県西播磨における経済・文化の中心地となっており、人口約45万。瀬戸内海に面し、古来より気候温暖の地として各種の産業が伝わっている。
- ②地域の特定は困難であるが、播磨は「延喜式」にもみられる如く古代から有力な皮革産地であった。中世以降播磨革としてその特徴ある牛馬革は名声をなし、すでに慶長時代にはその高品質な「白なめし革」は日本を代表する皮革であった。
- ③その牛革を使った革文庫は、創始の時期は不詳であるが、中世にさかのぼるともいわれている。江戸時代には播磨の物産としても著名であった。
- ④明治に入ってから新しい革なめし技術（クロム鞣、タンニン鞣）の導入があり、洋式生活の普及と共に古来からの白なめし革が次第に減少していった。この革を使った文庫類も同様の衰微の方向になって今日に及んでいる。従って文庫を作る技術者、職人も極めて少数となった。
- ⑤革文庫の伝統技術を生かし、革ぞうり、財布、小物類、額、テーブルセンターな

どが製造され、姫路の特産として特異な地位を築いている。

（2）技術の伝播・歴史的経緯

姫路白なめし革の産出は、ほぼ1000年ぐらゐの歴史があると思われるが、これを素材とした品物の生産もかなり古くから行われたと推測される。一説には豊臣秀吉が織田信長への土産物として室津文庫を献上したともいわれているが、資料的にはっきりしてくるのが江戸時代中期以降である。姫路革はとくに細工物として重用され、姫路城下の中・下二階町から東二階町にかけて箱類、文庫類、武具、馬具、たばこ入れなどの製造が行われていたし、さらに西国大名の参勤交代の筋道の拠点ともなっていた室津でも同様に盛大に生産されていた。

現在の技術の系譜を詳細に辿ることは不可能である。この名定一呂氏は室津の系譜に入る。たばこ入れ職人であった室津の小西安吉に弟子入りした。昭和6、7年（1932）頃で15才の時であった。同12年兵役、22年復員、24年（1949）に完全に独立して現在地（姫路市船橋町）で製造するようになった。元来黒ものの製品しかなかったが、時代を考え、同35、36年（1961）頃から色ものも手がけた。大阪方面での需要がかなり伸びた。兄弟子の壺坂光治氏（78）は病床にあり、すでに廃業している。

2. 素材

- ①(a)姫路白鞣革 ②白鞣業者である坂谷光男、島尾政次より直接、購入する。（一部略）
- ③(a) [姫路革のほかの材料] ベニヤ板、美濃紙、渋、漆、金箔。

3. 製作・加工の工程・用具

別表に示すA及びBである。

名定氏の談話：聞き取り記録から

昔の様式：昔の手文庫は黒漆仕上げばかりであった。革は張り木地で、太鼓皮のよ

うに硬かったけれども、油も塩も入っていた。文庫には松原、広山産の張り木地ばかりを使い、革は硬くても揉むとシボが出て、しかも硬いシボができた。

芯板: 芯の板には今は、折箱用の経木を4、5枚縦横に重ねて使う。ひずみが起きにくい。

文庫製造から見た今の姫路革: 姫路革類似品について: 本当の白なめしが少なくなって困っている。石灰脱毛したものは色は白いが、銀面が弱い。革に粘みがない。揉みが悪い。野球ボール革に馬革が使われるようになってから牛革白なめしが激減した。



写真2 漆塗りを施した姫路革を適度の湿度と温度の下で熟成させる室(むろ)。仕事がしやすいように工夫を凝らしている。(昭和61年撮影)

姫路革: 塩抜き不足のものがある。しかし、抜きすぎると色が出にくくなる傾向がある。最近はお口の品質の振れが多くなってきた。Sさんの革はサビを入れると「ぴゅーと走ってしまう」という(意味がよく分からない)。本来の姫路革は振れが殆ど無いものである。使いたくても白なめしの良いものがない、困っている。革を握ったときの感触、ひねったときのひねり具合、これが白なめしのときはうまくきいてくれる。馬革でも、握った感じがよい。

姫路革の揉みの判断: 製革業者は革を見せるとき、尻の方から見せてくれる。自分は頭と腹を見ることにしている。革の主体部分を占める尻の方は、肌理や揉み(シボ)が良いのは当たり前である。頭部と腹部で揉みと肌の良否が一目で、はっきり分かる。伸び加減も判然としている。特に、足先を見ると揉み加減が良く見える。足先が良いと、全体の揉みもよく、全体に柔らかい、触れがよい。

黒いフノリ液: 黒の材料としてはイカの「黒ペイ」を使う。墨や煤を使うところもあるようだ。

サビ: 水に鉄くずを入れて長時日おく。サビ水になる。鉄漿(おはぐろ)と同じ考え方である。

もち米糊: もち米を粉にして十二分に煮込んだものだ。今は澱を入れてない(合成防腐・防虫剤のようである)。

金箔置き: 漆が乾燥する直前に箔を載せないとうまく密着しない、長持ちしない。乾き不足で載せると、箔が漆に埋もれてしまう。箔を広く載せるときは、作業の順を考えながら漆の時間・箔載せの時間を見計らいながら仕事を進める必要がある。

革細工の歴史的背景

江戸後期の盛況

さて、ここで姫路あるいは播州における革細工の歴史を振り返っておきたい。

藤田武二『皮革産業沿革史』は江戸後期の盛業振りを描いている。「全国的な商品経済の発達につれて、従来はほとんど武器に向けられていた皮革の需要も、革羽織、革はっぴ、革足袋、革花緒、革煙草入れ、革文庫、革表紙などにも拡大し、その市場も全国に広がっていった。たとえば播磨国姫路を中心に、その周辺部落で作られてい

た「白鞆革」「革細工物」は、主として室津、飾磨の港から大阪・姫路の商人の手を通じて全国に売りさばかれた。「これらの商品には、主に武具、文庫、袋物があり、他に足駄の花緒、向爪掛（つまかけ）などがあり、また加工原料としての「白鞆革」は、そのままの形で多くの市場をもっていた」。姫路の「加工部門は、箱類、文庫類、武具、馬具類、稽古道具類などの製造が、主として城下町の中二階町から東二階町にかけて、軒並みに行われていた。」

矢内正夫編『姫路市史』（大正8年）に「正徳2年5月著の『和漢三才図会』の播磨土産中には、野里鍋の外に飾磨搗染、室津鞆革あり、寛延2年10月梓行の『播磨細見図附載土産名物』中には三才図会所載の外に姫路鞆煙草入れ、姫路丸山皿あり」「旧好古堂内に革細工所ありて藩士中其業に従ひし者あり、其売店は東二階町、中二階町にして店々軒を並べ、～安政年中平井八兵衛は革に擬して紙製の文庫類を製出せり、室津にても其細工を営める者あり、世に室滑と謂へり。」と記している。

参勤交代の武士の土産品に

姫路を通過するのに際し、「当時参勤交代の西国大名は、皮革特有の臭気のためにこの辺をよけて通ったといわれている。これらの店の中には、一軒で十数藩の大名を相手に商売するものもあったほどである。」「城下町以外の在郷でも革細工が行われていた。すなわち、当時の西国大名が参勤交代の折に拠点とした室津（播磨灘に面した小港）は、これらの武士を相手とする土産品として、主に煙草入れ、向掛、花緒などの製造販売の店舗が軒を並べ、更に、江戸、尾張、大阪との取引も多く、隆盛を極めたといわれている。」

二階町一帯が拠点、維新後の衰退

松本静吾編『姫路紀要』（大正元年）には「姫路革細工は姫路革と共に古来著名の産物なり、～細工としては高尚優美にして堅牢に且つ金箔を施すことに至っては、本細工独特の技なりといふ、徳川初代の頃より武士の武具馬具として此細工を用ゆること漸次に多くなり、酒井家の入部後河合寸翁の奨励によりて一層発達し、革会所を二階町に設けて、製品には一々捺印したりといふ」「明治維新と共に諸藩の用途全く跡を絶ち一般の需要は素より多からず、是に於いてか永く優勢なりし名産革細工も次第に衰運に向ひ、復た昔日の倂を留めず」「煙草入れは室津にて盛に製出する外各地に多くの生産あり、本市特産品とはいひ難きも文庫類の製造に於ては他に其の類を見る能はざるべし」とある。

室津の革細工：名定一呂の技術的故郷

会報『むろのつ』第2巻で柏山泰訓は細工物について次のように書いている。「近世、近代における室津の地場産業はなにかといえば、まず革細工をあげねばならない。室津に革細工が起こったのは、江戸時代室津が姫路藩の飛び地であったことと当時物資の輸送は海上が主であったことによる。播州の特産であるなめし革が室津で細工され、全国各地に出荷された。主な製品は革文庫、たばこ入れ、向皮であった。なかでもたばこ入れは有名であった。～革製のたばこ入れが世に出たのは享保年間（1716～36）といわれる。江戸時代も後半になると革製たばこ入れが広く普及しはじめた。腰にさげるたばこ入れは、町人の武士に対する経済上の優位をしめす小道具となり、高価な舶来革を用いたり、前金具や根付に趣向を凝らしたりした。それは単なる喫煙具ではなく、持ち主の自己表現のひとつでも

あった。

『播州室津革細工特別展図録』には「文政9年（1826）に室津に立ち寄ったシーボルトは、室津の革細工は全国的に有名で、革文庫、たばこ入れなどを作っていたと記しています。」と述べている。

名定さんが若い頃に細工物の修行をしたのは、こうした歴史をもつ室津であった。

次回からは「正倉院と皮革」の連載をします。

付表1 姫路革細工物の製造工程

(A) 文庫・大きい細工物の場合	
革の裁断	革専用の断ち包丁や鋏で切り取る。
コバ取り	革の周辺部の厚みを削る。昔は小刀で、今はコバ漉き機で漉く。
加湿	適度な湿気を与えるために、革の裏面に黒いフノリ液を刷毛で塗る。 フノリは革をしっかりさせる効果がある。(かつては蒟蒻玉を使ったようである。 大きな革のときは糊が刷毛では伸びにくいので、木ベラで伸ばす。
積置き	革の水分が均一になるように積み重ね、布で包んで熟成する。
型置き	金型を置く。プレス機で押さえて革に文様の型を入れる。型板は約150種ある。昔は木製であった。一部は焼きごてを使う。
陰干し	一晚行う。
(サビ入れ)	白物の場合、ここでサビ入れがある。※小物の項を参照
漆塗り	特殊な刷毛で塗る。漆を広く塗るときは靴ブラシを使う。 松葉描きに昔は筆を用いたが、大工の墨箆をヒントにして、女性の毛を細長く、穂先を硬く固めた手製の箆を使っている。 金箔をのせるときの漆の下地は、まったく油気のない「はく漆」を使う。油気があると金箔が剥がれてくる。 漆は3回ぐらいに分けて塗らないと、革肌の良さが死んでしまう。
乾燥	湿気のある室（ムロ）に入れる。 室は、昔は床穴式であった。即ち、床下に火気を置き、筵で囲み、筵に水をかけて湿気を作った。家の中が湿気るので今のやり方に変えた。作業も楽になった。
揉み	シボ出しのために縦横方向に揉む。最近の白なめしは揉みが不足であるので、ここで揉む。
漆塗り	さらに漆を塗る。工程全体としては2～3回塗る。
乾燥	湿度のある室に入れる。
粒取り	シボの山頂につやが出るように、タンポを使って生漆をのせる。 タンポは、昔は牛の腸を利用したが、今は氷嚢にしている。
乾燥	湿度のある室に入れる。この場合は約3時間。
ベニヤ貼り付け	檜板又はベニヤ板に美濃紙を貼り付けて下地としておく。 糊：米ともち米半々の6合に、虫除けに市販の柿渋盃2杯分を入れる。これを革の裏面に貼り付ける。
組立て	箱の形に組み立てる。
縫い合わせ	箱の四隅の縦軸を縫い合わせる。
完成	

(B) 小さい細工物の場合

革の粗型抜き	抜き金型は10種類以上ある。
コバ取り	革の周辺部の厚みを削る。昔は小刀で、今はコバ漉き機で漉く。
加湿	適度な湿気を与えるために、革の裏面にフノリ液を刷毛で塗る。フノリは革をしっかりさせる効果がある。
積置き	革の水分が均一になるように積み重ねて熟成する。
型置き	金型を置く。プレス機で押さえて革に文様の型を入れる。型板は約150種ある。一部は焼きごてを使って型を入れる。
陰干し	一晚行う。
サビ入れ	型の谷間に黒っぽい色を入れる。(ここは秘伝のようで、取材できていない。東京や大阪では「まこも」や「黒べい」のようなものに膠 <small>にかわ</small> を加えたものを使っているらしい)
拭き取り (漆塗り)	塗った後、革の表面を布で拭き取ると、シボの谷間にサビが残る。 物によっては漆塗りする。
彩色	漆以外の絵の具・主としてカシュー塗料で彩色する。
乾燥	室に入れて乾燥する。
組立て・完成	

付表2 神戸新聞朝刊の記事

神戸新聞朝刊:平成16. 6.15(火)の記事

“最後の職人” 逝く 姫路革細工名定さん 伝統に新風吹き込み

姫路革細工の“最後の職人”が亡くなった。個人で工房を構える唯一の職人だった名定一呂（なさだいちろ）さん（86）。書写の里・美術工芸館（姫路市書写）で革細工の実演を続け、市民や観光客に親しまれたが、2002年12月以降は体調不良のため休演していた。名定さんは1932年、御津町室津の小西安吉氏に弟子入りし、革細工職人の道に入った。戦時中はビルマ（現ミャンマー）などで8年間兵役を務めた後、47年に姫路市船橋町に工房を開いた。同館では94年の開館以来、毎週日曜に鍛えられた技を一般公開していた。

姫路革細工は、名産の白なめし革を使って古くから行われ、江戸後期には硯箱が将軍への献上品になったとされる。名定さんは、黒漆の単色だった伝統的な革細工に、顔料を加えた漆を使う新たな技法を編み出し、表現の幅を広げた。92年度に創設された兵庫県伝統的工芸品にも第1号として指定された。95年度には兵庫県文化協会のふるさと文化賞を受賞した。